新着案内

町田の文学

第 46 号　2020.5.1 発行　町田市民文学館ことばらんど

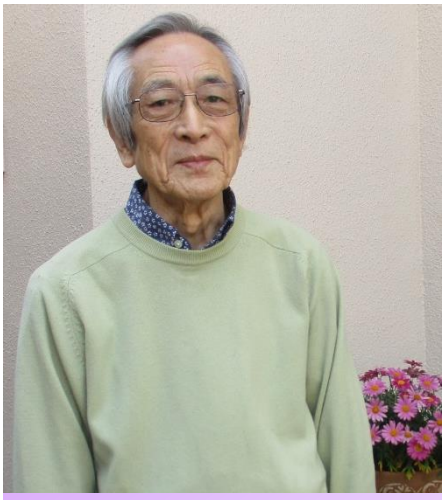
町田市民文学館で著書を執筆

町田市在住の作家　飯島敏宏氏インタビュー

『バルタン星人を知っていますか？』『ギブミー・チョコレート』

飯島敏宏氏、といっても、小説家としての飯島氏をご存知の方は少ないかもしれません。

しかし、「ウルトラQ」「ウルトラマン」「ウルトラセブン」の脚本家、監督であり、一時代を画したテレビドラマ「金曜日の妻たちへ」の演出家、と言えば、これらの作品は、四〇歳以上の方たちにとっては、一気に子どもの頃、若かりし頃に引き戻される作品ばかりでしょう。さらには町田市成瀬台を舞台とした映画「ホームカミング」の脚本家・監督でもあるのです。



飯島敏宏氏

1932 年生まれ。慶応大学卒業後、現在のＴＢＳ入社。66 年、円谷プロダクションに映画部所属の監督として携わる。70 年、木下恵介プロダクションに出向し、「金曜日の妻たちへ」などを演出。

飯島氏は二〇一七年にウルトラシリーズ制作の思い出を著したノンフィクション『バルタン星人を知っていますか？』で「作家デビュー」、一九年には戦時中「少国民」と呼ばれた子どもたちを描いた小説『ギブミー・チョコレート』を上梓しました。そして、この二冊は、静かな、参考資料を豊富に取りそろえた、当館閲覧室を利用いただき執筆されたもの、なのです。

今回は、最新作にして、初の小説である『ギブミー・チョコレート』を中心にお話をうかがいました。

小説の舞台は東京・本郷。主人公の小学生、ヒロシは高級注文洋服店山崎テーラー（お兄さんに「高級」を忘れるなと言われている）の三男坊。家には家業を切り盛りする職人あがりの継父と母、しっかりした二人の兄、弟妹、弟子の職人さんたち、近所には親友のチュウ、ガキ大将のベンちゃん、ちょっとおませなハルエちゃん、チュウのおばあさんで、武家の女性の気質を備えキリっとした「おたかお祖母さん」など、多彩な大人、子どもが暮らしています。

初めての小説に込めた思い

――「ウルトラマンもの」である前作は、長く制作の現場にいらした方ではないと書けない内容が満載で、ファンにとってたまらない一冊だと思います。そこから一転して第二作を「少国民」「東京大空襲」をテーマに、小説仕立てでお書きになった経緯からお聞かせください。

飯島　一つには、東京大空襲というと、資料を基にお書きになったものは、判で押したように「その日は強い北風であった」となっているんです。確かに強い北風の吹く日でした。でも僕のうちの東方に本所深川があって、そちらから燃えてきたから、炎の中を逃げ惑った僕にとっては「北風」ではないんですよ。実際にB29の下で三度炎に追われた自分の経験で東京大空襲を書きたいと思ったのです。焼け跡の様子も記録で書かれたものと僕が見たものは違う。皆さん川へ飛び込んで、そのまま焼けていた。川に突き刺さっていて、とても人間なんて思えない。本当に見てはならないような姿でした。

それと、本所深川のあたりの方たちと比べれば、「本郷なんて(被害が)甘かった」と言われる。確かに、僕たちの小学校の犠牲者はたった一人でした。でもその一人の子は、こういう子だったんだよ、ということを書きたかったのです。それが作中ではチュウという親友ですが、彼の中には僕自身も投影されています。

大人からは「ご時世だから」という言葉が流行語のように出てくるような世情になっていきます。それでも小学生には楽しいことも、それなりにある学校生活が続いていました。一方ヒロシにはそれとは別の、大人の世界を垣間見る「もう一つの学校」があったのです。そこには水が浸み込むように、戦争への態勢が入り込んできていました。

KADOKAWA　2019.8
「「少国民」と呼ばれた、ごく普通の子どもたちの物語」（本の帯より）

飯島　うちの隣は、当時はカフェと呼ばれた、今で言うナイトクラブでした。そこに左翼かぶれの帝大生が来て、大声で議論している。何しろ隣とは板一枚の長屋ですから、けんかのような大声が夜中に聞こえてくるんです。そうすると、うちの住み込み職人の昌司さんが行って仲裁する。昌司さんは独学でいろいろ勉強しているから、帝大生とも堂々と渡り合う。「コミンテルン」(国際共産主義者同盟)なんていう言葉も知っているので、継父はハラハラしていたようですが、うちのお客さんの大学教授や重役さんにも「職人に面白いのがいる」ってかわいがられていた。

でも世の中がおかしくなってくると、目をつけられるようになっていきました。近所の本富士警察というのは当時特高の大元締めと言われた署です。ドラマでは特高というと怖い顔しているように描かれますが、本物はにこにこしている普通のおっさんなんです。僕のうちにも寄って、お茶飲んでごはん食べたりして、探っていた。僕に「コミンテルン」という文字の駒が出るようなゲームをくれて、昌司さんの反応を見たりもしていたんです。

映画「ホームカミング」
監督／飯島敏宏／　脚本／千東北男（飯島氏のペンネーム）主演／高田純次　撮影地／町田　「ホームカミング」製作委員会　2011

昭和一六年に学校の名称が「国民学校」に変わり、軍国教育が始まります。那須への集団疎開、担任が戦地帰りで心を病んでいるイタチ先生に変わるなど、ヒロシたちの生活も大きく変わっていきました。親友のチュウは横暴な先生に反抗的で、ひどい折檻を繰り返し受けますが、いつも毅然としているのでした。そして、昭和二〇年、六年生になったヒロシたちは、三月一〇日、東京大空襲の日を迎えます。

飯島　三月二日頃、東京の学校のほとんどが、中級学校を受験する六年生を集団疎開から帰京させました。だから空襲の日に子どもが大勢東京にいることになってしまいました。結局試験は定員に満たず無試験合格だったのに、先頭に立って「子どもたちを帰京させるのはやめよう」と言う役人がいなかったのです。

人々が逃げ惑う中、チュウは皆に敬礼し、教え込まれた通り焼夷弾に覆いかぶさって消すために炎の中に消えていきます。学校での「たった一人の犠牲者」になったのです。

そして令和になり、小学校の同窓会に旭日小綬章を首から下げたイタチ先生も出席し、チュウを「逃げ遅れた」残念な生徒としてスピーチをします。それを聞いた八七歳のヒロシの怒りは頂点に達します。「チュウは逃げ遅れたのではありません！あなたが、徹底的に鍛え上げた通り、皇国の少国民として、栄えある戦死を遂げたのです！」「チュウを殺したのは、B29爆撃機ではありません。イタチ先生、あなただ！」

飯島　僕たち、昭和六、七年から一〇、一一年生まれは「少国民」という教育をされた年代です。本当に特殊な教育でした。教えられた通りなら死んでなくてはならないのに、僕は三回も空襲を逃げ延びた。当時は「生き残った自分たちは卑怯者だ」というトラウマがあった。そこまで徹底して教え込まれていたんです。このことを今書かなければと思ったのは、ＩＳのことがあったからです。ＩＳの子どもたちがなぜ嬉々として自爆テロができるのか、それはやっぱり極端な教育しか受けてないからですよね。僕たちと同じです。僕たち「少国民」に、当時いかに画一的なひどい教育をしたか、ということを忘れてもらっちゃ困る。死生観さえが違ってしまうのだから。

あの先生の教員生活の中で、僕たちの担任だったのは、たった三、四か月のことで、人生のほんのちょっとのことだったのでしょう。僕たちはあれだけひどい目にあったのに、先生は覚えてもいなかった。戦後は素晴らしい教育をなさったのかもしれないから、全否定するつもりはありませんが、書いておきたかったのです。

戦後。世の中は一変し、教科書に墨を塗らされるなど「少国民」だったヒロシの心は「羅針盤を失った船のように」なり、街をさまよい歩くようになります。そんなある日、ヒロシは銃を持った進駐軍の兵士に道を聞かれます。「ゴー・ストレイト・オン！」覚えたての英語で答えたヒロシの手に、礼として載せられたのは、ハーシーチョコレートでした。「ゴー・ストレイト・オン、アンド・ユー・キャン・ファインディット（まっすぐ進み続ければ、何かが見つけられる）」という言葉と共に・・・。

©円谷プロダクション

飯島　戦争がテーマですが、ぜひ面白く読んでもらいたい、中学一年生に分かる言葉でと思って書きました。戦争というのは、普通に生活している中に、あっという間に来るんだということを知ってもらいたいのです。

小学館　2017.7
副題は「テレビの青春、駆けだし日記」。ファン垂涎のクロニクル。

『バルタン～』Ｗｅｂ版、『ギブミー～』続編を準備中

――『バルタン星人～』を拝読すると、副題にあるように、お仕事の面では、テレビ草創期の幸せな時代を過ごされたのだなあと、うらやましく思いますが、ご自身で振り返られていかがですか。

飯島　確かに今の監督たちの苦労を見ていると、いい時代だったとは思いますが、なんでこんなに運が悪いんだろうと思うこともあるんですよ。

脚本・監督作品「ホームカミング」は封切りが二〇一一年三月一二日の予定でした。しかも封切館は東北の六館から押さえていたので、結局劇場上映はほんの数館になってしまいました。高田純次を主役に、ウルトラマンや「金妻」の役者たちが「勤労奉仕」で出演してくれたのに、本当に残念でした。

その次は『ギブミー～』を書き上げた時。執筆の無理がたたって肺炎で入院、取材が全部お断り、になっちゃった（笑）。

――次回作も準備されているのでしょうか。

飯島　まず『バルタン星人～』のＷｅｂ版の準備をしています。紙の本以上のものを出さなくてはならないので、記憶をさらに掘り起こしているところです。それと、『ギブミー～』の続編を書くように言われています。

――またヒロシやベンちゃんに会えるんですね。再び文学館から新しい作品が生まれることを楽しみにしています。ありがとうございました。

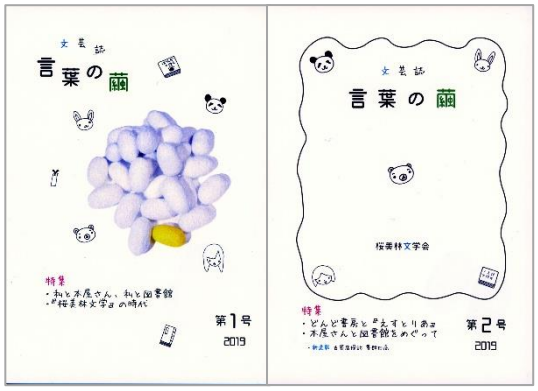
（三月二三日　文学館にて）

新 刊 紹 介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

『言葉の繭』第１号／第２号

桜美林文学会＋桜美林大学日中文化研究会　2019.4／2019.12



桜美林大学の学生・教員を執筆者の中心とした、言葉や文学をめぐる文芸誌。言葉、本屋、古書店、図書館をテーマにした文章のほか、短歌、詩、小説、文学研究などが誌面を彩っている。一号「編集後記」で、編集人の藤澤太郎氏は創刊の経緯から「とりあえず雑誌」と名付けているが、地域性が高く、内容も多彩であり、息長く続くことを願う。「ことばをつむぐ」、「特集『桜美林文学』の時代」（一・二号）などの企画は興味深い。どうぞ町田市民文学館にも注目いただけますように。

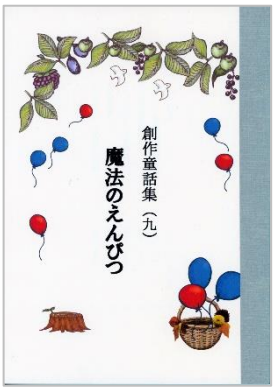
桜美林文学会　「とりあえずは桜美林大学の学生・教員が中心になるだろうということで「桜美林文学会」とした。（略）といっても桜美林大学・学園を代表しているわけでは全くないので、分不相応な名称だという誹りは免れないかもしれない。（略）「桜美林」と不可分の関わりがある会でもないので、学外からの寄稿も積極的に受け付けていく予定である。」（第１号「編集後記」より）

『創作童話集（九）　魔法のえんぴつ』

童話創作の会『魔法のえんぴつ』　2019.12

魔法のえんぴつ
2009年、町田市公民館での「童話創作実践講座」受講生によって立ち上げられたサークル。指導者は町田ゆかりの児童文学作家、国松俊英氏。

国松俊英氏に指導を仰ぎつつ毎年創作集を出している『魔法のえんぴつ』。今号は創作、再話が六編収められている。日常生活からテーマを見つけ、まとまった文章として創作する活動の一年間の集大成である。「上手にできなくても自然に笑顔になってきます。これは書く者の幸せな時間だと思っています」（「あとがき」より）。こうした文学活動を継続している市民の方を応援できる「文学館」でありたいと、私たちも励まされる。



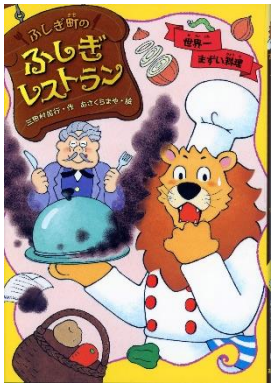
【主な寄贈定期刊行物】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」
詩　誌：「璞（あらたま）」「構図」
短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」
「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」
俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「舫（こだま）」
「都市」「風土」「波」「八千草」「暦日」
その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

新 刊 紹 介

『ふしぎ町のふしぎレストラン２　世界一まずい料理』
三田村信行／作　あさくらまや／絵　あかね書房　2020.3

『オオカミの時間　今そこにある不思議集』
三田村信行／著　佐々木マキ／画　理論社　2020.3



「ふしぎ町のふしぎレストラン」第二弾。ライオンと羊に変えられてしまったシェフと家族は魔法を解くためにお客を喜ばせる料理を作り続ける。今回のオーダーは「世界一まずい料理」！さて・・・。

＊

「今そこにある不思議」とは「目に見えない現実」がちょっとした裂け目からちらちょろりと顔を出すこと。その不思議を様々な物語に紡いだ短編集。佐々木マキとは四五年ぶりのコンビだという。大人も十分楽しめる、ちょっとコワイ作品集。

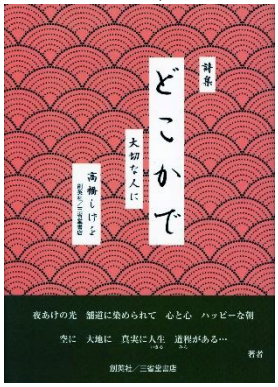
三田村信行
1939 年生まれ。大学在学中に創作を始め、幅広い分野の児童文学を手がける。巌谷小波文芸賞(2009)、『風の陰陽師』で日本児童文学者協会賞(2010)受賞。町田市在住。

紙芝居『コロコロサッカーボール』
中垣ゆたか／作・絵　教育画劇　2020.1

しんじの父さんはサッカースタジアムで働いている。そこではいろいろな人が仕事をしている。チケットのもぎり、清掃、店員、もちろん選手。そしてその選手をサポートするドクターやトレーナー、道具やユニフォームを管理するホペイロ、監督、通訳・・・。そしてしんじの父さんの仕事はチームの運営をすること。スタジアムを支える多くの人の仕事を紹介する紙芝居。

中垣ゆたか
1977 年生まれ。イラストレーター、絵本作家。絵本をはじめ挿絵、雑誌表紙など多数の作品がある。
町田市在住。

『詩集　どこかで　大切な人に』
高橋しげを／著　創英社／三省堂書店　2020.3



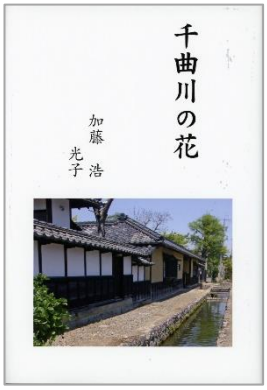
著者一五冊目の詩集。所収中に「恩田川のサクラ」という作品がある。

（前略）恩田川の川岸　花筏と花筏／どんな　お話をしているのだろうかなアー／さざ波と　さざ波が／戯わむれ下流に向って去く（後略）

町田に住む者にとって誇れるこの季節の恩田川。そこに詩人は生き様や心のバランスを見ている。

高橋しげを
東京都生まれ。本作が１５冊目の詩集（英文も含む）。信条は「雑草のごとく踏まれても強く生きる」。町田市在住。

『千曲川の花』加藤浩・光子／著
ミカリノ出版　2020.1



雑司ヶ谷のお墓を移設した折に古い石板が発見された。そこに記録された祖先の出自を手がかりに、母方の家族をたどる旅が始まる。やがてその原点が松代にあることが分かる。子孫たちの波乱万丈な人生もたどりつつ、松代で主人公の夫妻は感慨に浸る。祖先たちに思いを馳せつつ、ルーツを探す物語。

加藤浩　1946 年生まれ。2006 年定年退職後、語学留学を経て執筆活動を続ける。
加藤光子　1948 年生まれ。９回にわたる語学留学を経て、夫浩氏との共著は４冊目となる。町田市在住。

〈貴重雑誌をめぐる物語〉

その六

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八七〇タイトル、一万一千冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

作詞家・宮川哲夫旧蔵の歌謡雑誌①

「新歌謡界」

新歌謡界　創刊号
1952(昭和27)年7月

編集人：英 玲二
発行人：植田哲二
発行所：新歌謡界詩社（広島）
刊行頻度：隔月刊か
所蔵巻号：創刊号（一九五二・昭和二七年七月十五日）～一三一号（一九七四・昭和四九年二月一日）の計四四冊（欠号多数）。

宮川哲夫と町田

昭和三〇年代を中心に、「街のサンドイッチマン」（鶴田浩二）や「ガード下の靴みがき」（宮城まり子）、「夜霧の第二国道」（フランク永井）、「東京ドドンパ娘」（渡辺マリ）、「湖愁」（松島アキラ）、「美しい十代」（三田明）、「霧氷」（橋幸夫・第八回日本レコード大賞）など、昭和を代表する名曲の作詞を数多く手がけた作詞家・宮川哲夫。伊豆大島生まれの彼は、一九五〇（昭和二五）年に教員として町田の忠生小学校へ赴任し、約八年間を家族とともに忠生村木曽（現町田市木曽町）の借家で過ごしました。

一九五八（昭和三三）年に、フランク永井の唄で大ヒットした「公園の手品師」に歌われた銀杏は、住まいの目の前にあり、いま「町田市名木百選」にも選ばれている、福昌寺の大銀杏がモデルと言われています。

そんなご縁で、当文学館には宮川の蔵書や日記、レコードや歌詞草稿など膨大な遺品が、ご遺族から寄贈されています。今回はその中から、歌謡雑誌「新歌謡界」をご紹介します。

同誌は、昭和歌謡史に多大な足跡を残した同人誌ですが、当館に寄贈されている創刊初期の巻号（創刊号、第三号、第四号～第七号、第九号、第一二号、第一三号、第一五号、第一七号・・・など）は、調査の限りでは、国立国会図書館（第一五九号～終刊号）にも、同誌を主宰した石本美由起の郷里の広島県立図書館（第四三巻～終刊号）にも、所蔵されていないようです。

石本美由起の「新歌謡界」

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の終戦とともに、それまで戦時歌謡一色だった流行歌の世界にも、大きな変化が訪れます。重苦しい生活からようやく解放された庶民にとって、明るく希望に満ちた「リンゴの唄」（並木路子・霧島昇）は、新しい時代の到来を告げるものとして、当時一世を風靡しました。これを機に、各レコード会社は、ますますヒット曲を売り出すことにしのぎを削るようになります。戦前から大衆歌謡の作詞を手がけていた西条八十（やそ）、佐藤惣之助、サトウハチローなどの詩人に加えて、作詞家を志す多くの若者たちも登場してきます。

そんな時代の要請に応えるように、新しい流行歌の作詞家を目指す同人誌が次々に生まれました。中でも、後に「港町十三番地」「悲しい酒」（共に美空ひばり）、「矢切の渡し」（細川たかし）などの作詞家として名を成す石本美由起によって、一九五二（昭和二七）年七月に創刊された「新歌謡界」は、その中心的な存在でした。

石本は、一九二四（大正一三）年広島生まれ。幼少から体が弱く、家に閉じこもって詩歌を読

みふけるような子どもだったと言います。昭和初期の作詞家・高橋掬太郎（きくたろう）の同人誌「歌謡文芸」への投稿などを経て、当時すでにキングレコードの専属作詞家として、「長崎のザボン売り」（小畑実）や「憧れのハワイ航路」（岡晴夫）などのヒット曲で知られていました。

一九五一（昭和二六）年にはコロムビアレコードに移籍しますが、翌年の「新歌謡界」創刊は、二八歳の石本の新時代を担おうとする気概が込められたものだったのかもしれません。

創刊号は、B５判・孔版印刷・二二頁。巻頭「創刊祝筆」で、彼は次のように述べています。

「私は、全国の詩友に『新歌謡界』を、紹介して一人でも多くの仲間に参加して頂きたいと思っている。／レコード会社に売込むことだけを考えて、ヒットソングの模倣模写する連中も少なくないが、この『新歌謡界』に、集る人達は、あくまでも新しい時代の新しい歌を生み出すべく努力して頂きたい。／真面目に努力することが、デビューする日に通ずる道なのだから…」。

『新歌謡界』と宮川哲夫

創刊号には、特別寄稿として、丘十四夫、和田隆夫、石本、板倉文雄の四人の歌詞作品が掲載されています。和田隆夫にはすでにヒット曲「ダンスパーティーの夜」（林伊佐緒）があり、丘は後に丘灯至夫として「高原列車は行く」（岡本敦郎）、「東京のバスガール」（コロムビア・ローズ）、「高校三年生」（舟木一夫）などの作詞が、代表作となります。いずれも石本にとっては先輩格、板倉は「睦まじき悪友」と紹介されています。

特別寄稿に続いて、同人一一人の作品が紹介されますが、その冒頭に置かれているのが宮川哲夫の「リーナ嘆くな」という作品で、彼が創刊時から同人として加わっていたことが分かります。次いで準同人（六人）、会員（二〇人）の作品が並びます。

創刊号では、主宰の石本と同人・準同人・会員を合わせると三八名になりますが、翌年一月発行の第五号には、「新歌謡界詩社一同」として、石本を筆頭に全国から六二名の名前が掲げられていて、同人誌として着実に裾野を広げている様子がうかがえます。

また各号には、石本の「東京から横浜から」と題する連載随筆があり、創刊号のそれには、宮川との交流が次のように記されています。

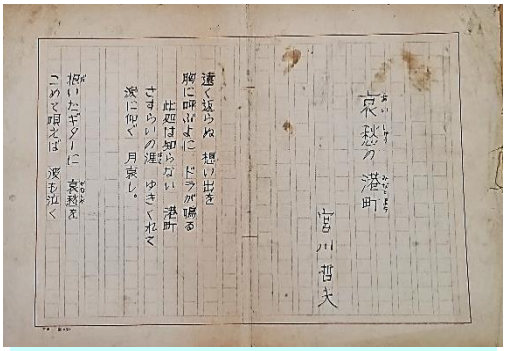
「今度、私が同人として紹介した詩友は、みんな好感のもてる人達ばかりですが、特に宮川哲夫君とは、親しくして居ます。／時々、私の家にも遊びに来てくれて、歌謡の話となるや、御互に日の暮れるのも忘れて語り合うのが常です。／先だって、宮川君の作品「哀愁の港町」が近江俊郎さんで吹込みされ、私も吹込みに、案内役として、亦、友人として立ち合ったけれども、感激に頬を染めた宮川君のあの日の姿は、いまも私の瞼の中にはっきりと残ってます。／私自身も「長崎のザボン売り」当時が回想されて、瞼が熱くなりました。／来月あたり、亦「異人館の雨」を吹込むことに決定したので、私も宮川君と共に喜んで居ます。」

「哀愁の港町」は、上原げんとの作曲でレコード化された宮川のデビュー作です。町田に越して一年半あまりの頃の作で、まだ教員だった彼は小学校から帰ってくると、借家の二階の自室にこもって、反故になった生徒の答案用紙の裏などに、せっせと習作を書き溜めていました。

石本は、宮川より二歳年下ですが、すでにヒット曲をもつ先輩作詞家として、また時に良きライバルとして、その後もしばしば随想で彼に触れています。

〈つづく〉

（当館元館長　守谷信二）



「哀愁の港町」原稿（当館蔵）

「遠く返らぬ　想い出を
胸に呼ぶよに　ドラが鳴る
此処は知らない　港町
さすらいの涯　ゆきくれて
涙に仰ぐ　月哀し。」

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006 年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

文学サロンミニ展示今後の予定

（原稿・原画保護など諸般の事情により
変更される場合もあります）

らんちゃん
©中垣ゆたか

ことくん
©中垣ゆたか

●11/3(火)～12/27(日)

三島由紀夫未発表資料初公開（仮）

市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。
また、勝手ながら、貸出用と保存用の２冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

「町田の文学」第 46 号　2020 年 5 月 1 日発行
編集・発行／町田市民文学館ことばらんど
〒194-0013　町田市原町田 4-16-17　TEL 042(739)3420
FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター
Twitter@machida_kotoba

＊この冊子は 500 部作成し、１部あたりの単価は 125 円です（職員の人件費を含みます）